

# 東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	4th International Symposium in Chinese Safety Pharmacology Society
別タイトル	4th International Symposium in Chinese Safety Pharmacology Society
作成者（著者）	安東, 賢太郎
公開者	東邦大学医学会
発行日	2015.06
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 62(2). p.161 162.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	学会参加記
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.62.161
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD74502793">https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD74502793</a>

## 4th International Symposium in Chinese Safety Pharmacology Society



安東賢太郎

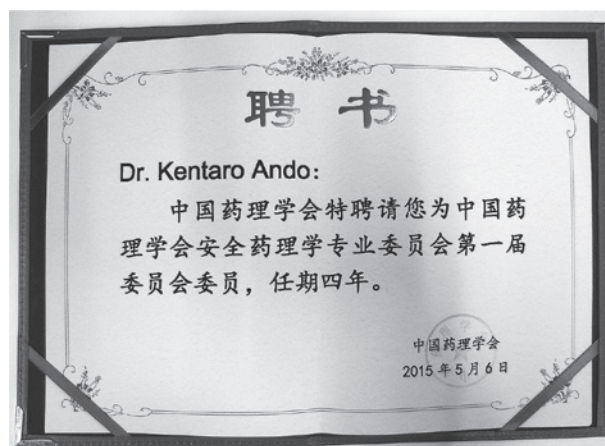
東邦大学医学部薬理学講座

2015年5月7、8日に中国広州市で開催された中国薬理学会安全性薬理学専門委員会成立大会並びに第4回安全性薬理学国際学術シンポジウムに参加した。今回のシンポジウムは中国薬理学会の中に安全性薬理学専門委員会が設立され、学会として認められたことを記念する特別な会で、アメリカから国際安全性薬理学会長が、日本から日本安全性薬理研究会長と評議員の計5名が招待された。学会設立くらいで大げさと思う方がいるかもしれないが、中国では学術団体でも自由な設立は難しいので、新規な学会が設立されたということは政府に学会の存在を認めてもらえたということである。さらに、政府に認可されたことは活動の運営費や会を維持するための人件費も、ある程度補助されるということであり、関係者にとってはとても大きな出来事である。

シンポジウムの初日は学会設立に関する報告と招待者の講演で、報告は中国語で、中国人以外の講演は英語で行われた。2日目は一般発表で発表は全て中国語で行われた。初日の発表内容は中国と日本の安全性薬理のレギュレーションが各1題、心循環器系が4題、中枢、炎症、消化器が各1演題ずつであった。この中で私はある指標を用いれば、嘔吐しない動物であるげっ歯類で嘔吐の予測ができるという報告をした。日米EU医薬品規制調和国際会議(International Conference on Harmonisation of Technical Requirements for Registration of Pharmaceuticals for Human Use: ICH)で制定したICH S7Bガイドラインに関連した薬物による心臓再分極過程に対する影響および催不整脈性の検討に対しては日本と同様、中国においても関心が高いことがわかった。心循環器系の演題のうち3題は日本ですでに聴講した内容だったので、私にとっては新規な演題はなかった。中国からの1演題は臨床試験のタイ



発表中の著者。写真右手には中国語に翻訳されたスライドが映写されていた



「中国薬理学会は貴殿に中国薬理学会安全性薬理学専門委員会第1回委員会委員、任期4年を委託したく、お願い申し上げます。」と記載されている(らしい)

ミングに関する演題で、中国語での発表だったので詳細は不明であるが、スライドを眺めた限りでは中国ならではの話はなかったように思われた。2日目は「発表は全て中国語で行われ、聞いていてもわからないでしょう。」と主催者が気を遣ってくれ、クロージングセッションまでわれわれを町へ連れ出してくれた。私が初めて中国の学会に参加したのは中国人の反日感情が非常に高かった2012年10月だった。この時は私が学会会場から外へ出ることは主催者にも私にも考えられないことだったので、今回の対応と町の様子はその時とは隔世の感があった。

一方、町の変化と対照的に2度参加して変わらない中国の学会の様子もいくつかあった。例えば、中国の方々は電話が大好きらしく会場内で携帯電話の着信音がそここで鳴り、席に座ったままで通話をすることである。今回は座長までもが壇上で携帯電話を使っていた。また、会の運営もどことなく“ユルい”ままで、学会前日の招待者だけを集めた会長主催の懇親会に「飛行機が遅れた。」と言って、

会長が遅刻したり（一方で、会長が到着する前に勝手に飲み食いをしていた一団も存在）、会場で初めて自分が座長であることを知らされたり、主催者が会場を把握していなかったりである。極めつけは、大会長の発表画面になぜ自分の名前があるのか不思議に思っていたら、いつの間にか中国薬理学会安全薬理学専門委員になっていた。「そんなこと知らない」と言いたいところであったが、ようやく設立された学会の最初の委員なので、大変な名誉とありがたきお受けすることにした。しかしながら、このような状況でも時間は正確に運営されていたことは前回とは大違いであった。

いまだに解決されていない国家間の問題はあるが、中国滞在中はどなたにも親切にいただき、非常に快適に過ごせたことを学会主催者および関係者に深く感謝したい。

本シンポジウムの参加に平成25年度東邦大学創立60周年記念学術振興基金奨励金を利用した。